

## 玉島湊の盛衰

### 盛衰の概要

江戸時代も中頃の初め、元禄年間(十七世紀末)には最も繁栄した玉島湊も、かつては乙島と柏島にはさまれた狭い水道で、船の避難や風待ちに利用されたり、古くから良質の水が多量に出る島——水島としての給水基地としても知られていたところでもある。(『水島』の水島参照)

また、古くは「玉の浦」と呼ばれ、万葉の歌人にも詠まれたこともあり、とにかく古代から瀬戸内航路の要地でもあった。

——「玉島とは玉の浦から由来するとする説が強い」

しかし、江戸時代の初めまでは、二つの島に散在する漁業の小村でしかなかった。

ところが寛永十九年(一六四二)、水谷勝隆が備中松山藩主となるにおよんで、山間に位置する

松山城下町の外港として玉島港及び周辺の新田開発という二大事業を計画し着手した。

そして二代藩主勝宗に至って完成をみた。

さらに高瀬通を開削して高梁川と玉島港を結び、松山と玉島との間に舟運の便を開いたことは、玉島湊の飛躍に大きなはずみをつけた。

かくして、十七世紀の中頃には、高梁川流域の松山藩領内の商人を誘致して、玉島港問屋町を形成して特権を与え、千石船の寄港地として繁栄を図り、十七世紀の中頃から十八世紀の終り頃までの約百五十年間にわたって、最も隆盛を極めることとなった。

しかし悲しいことには、玉島港に流れ込む見川・道口川が運ぶ土砂が、長い年月の間に港を埋め、さらに高梁川も大量の土砂を河口一帯に運び、三角洲を作っては沿岸を埋めていく。もつと不運なことは、玉島湊が三藩による分

割支配のもとで統一と協調に欠け、港の管理運営に大きな支障が出るなど、十八世紀末には千石船の寄港が困難となり、ついには満潮時にももやつと三々四々石積み船が入港できる程の状況となって、玉島港の衰退がはじまることとなる。



「肥物問屋の蔵前」 北前船は年に1度、「春上り」(6~7月)「秋上り」(9~10月)のいずれかに、20~30隻もの船が「にしん粕」「こんぶ」などを積んで入港した。このため問屋では佐馬船で広島県沖まで出向き、取りきの北前船を望遠鏡でとらえて、水先案内を勤めて、玉島港の自宅まで迎え入れたという。(明治時代)

### 玉島湊盛衰年表

(昭六三・四・十渡辺作表)

寛永 十六年 (一六三九)	松山藩により玉島の港かせぎが開始された
寛永 二十年 (一六四三)	松山藩が玉島港問屋株證書を作り施行する
正保 三年 (一六四六)	玉島新村の問屋町が形成された (十軒程度)
万治 二年 (一六五九)	高瀬道の開通
延宝 六年 (一六七八)	新町築堤が新しい船着場となり、阿賀崎新田村の問屋町が形成された。
元禄 元年 (一六八八)	阿賀崎新村の問屋数約三十軒
元禄 十五年 (一七〇二)	玉島新村の問屋数約三十軒
享保 六年 (一七三一)	水谷家の断絶にともない天領(倉敷代官所支配)・丹波亀山藩領・松山藩領と三藩による玉島港分割支配が始まる。
享保 十四年 (一七三九)	大洪水のため柏島・乙島間に中洲が発生し水門の水はけが悪くなる。
延享 二年 (一七四五)	阿賀崎新村の問屋数三十五軒
宝暦 年周 (一七五五以降)	玉島新村の問屋数二十六軒
明和 五年 (一七六八)	阿賀崎新村の問屋数三十軒
安永 五年 (一七七六)	幕府により油物統制令がしかれ玉島の問屋は大きな打撃を受けた
	阿賀崎新村の問屋数十九軒
	阿賀崎新村の問屋数十三軒
	このころから備前児島郡の藤戸・天城・連島西之浦・浅口郡寄島などに港が発達

- 天明 二年 (一七七八)
- 寛政 元年 (一七八九)
- 文化 六年 (一八〇九)
- 天保 七年 (一八三六)
- 天保 十二年 (一八四一)
- 明治 元年 (一八六八)
- 明治 五年 (一八七三)
- 明治 十年 (一八七七)
- 明治 二十四年 (一八九一)
- 明治 三十年 (一八九七)
- 明治 三十四年 (一九〇一)
- 明治 四十三年 (一九〇八)
- 大正 十四年 (一九二五)

し、玉島の問屋が苦境に立ち退散するものが増えてきた。

玉島港問屋が衰え始める。

洪水により船穂中新田の堤防が切れる。通町土手町の町家流失多し。

御蔵米を積む大船はおよそ五十町(約一キロメートル)の沖合で船積みしなればならぬ程に港が浅くなつた。(松山藩の記録)

冷夏により大飢饉発生し餓死者多数。物価暴騰し庶民疲弊する。

天保改革令により問屋株解散

玉島騒動・松山藩士熊田恰は鳥羽伏見の戦の敗残旧幕軍兵の責任者として清滝寺にて自決する。玉島はこれにより戦火をまぬがれた。

玉島港町問屋数五軒

玉島港での取引品目・数量が減少。

山陽鉄道が倉敷・笠岡間開通し、玉島駅も営業を開始する。

玉島村と阿賀崎村とが合併し玉島町が発足。

山陽鉄道全線開通

宇野線開通し、国鉄連絡船宇高航路も開設。これにより四国連絡の生る宇野港にゆずることとなる。

高深川改修工事完了。伯備線倉敷・実粟間開通。

昭和 三年 (一九二八)

昭和 十年 (一九三五)

昭和 十二年 (一九三七)

伯備線全線開通

高瀬舟による物資輸送の必要が少なくなる。

機帆船の利用が盛んとなり四国九州との取引が範囲が拡大し玉島港活気をとりもどす。

日華事変発生。引続き第二次世界大戦の勃発等により、戦時統制経済で商業活動が制約される。玉島港及び商業の発展停滞。



「問屋の勘定場」

見か

春の作付けに備えて、上り櫃に火鉢を据えて、商談に訪れる人を待つ。その奥には三つ折りの木製張場格子にかこまれた帳場では 記帳に要念がない。